

## 編集後記

『関西大学視聴覚教育』第28号（2005）が無事刊行の運びとなりました。まず、御多忙の中にもかかわらず、編集委員会からの原稿依頼に快く応じて下さった諸先生方に感謝の言葉を捧げたいと思います。また、本号刊行のために献身的なご協力を惜しまれなかった外国語教育研究機構事務室の皆様方に対し、深く感謝の意を表します。それぞれの構成員が所属大学に深い愛情を抱く私立大学であればこそ、こうした教職員の連携が充実したものとなることを実感させられた思いです。

本号では研究論文が2編寄せられましたが、そのうちの1篇はコンピューターを利用した中国語教育に精通した先生によって執筆されたもので、マルチメディアを介した教育の重要性が高まっている今日の教育に資するところ大なるものと思われます。また、もう1篇は朝鮮語を通時的に研究されている先生によって執筆されたもので、朝鮮語の変則用言を言語史的に深く考察すると共に、ビデオ教材を利用して言語の変遷を学生に理解させようとする独創的な発想を提示しておられます。

「特別講義」はドイツ人の先生とロシア人の先生による講義内容を紹介したものとなっています。「教学レポート」は7編が寄せられ、それぞれ視聴覚教材を使用した教育における経験を踏まえた上での実践的な内容となっており、学ぶところが多いと思われます。また、軽快な筆致で書かれたエッセイが寄せられましたが、思わず最後まで読んでしまう魅力溢れるもので、学生にも是非読んでいただきたいものです。

ところで、本紀要は視聴覚教育の発展に資するものではありませんが、ハード面での充実を伴わなければ研究の成果を教育の発展に結び付けることが容易ではありません。視聴覚教育を通じた「学の実化」は、教育理論・教育経験の深化と時代に即応した視聴覚施設の充実という両側面を支えにしてこそ、より一層推し進めることが可能なものとなるでしょう。

最近「新キャンパス構想」が発表され、本学の飛躍的発展が図られつつありますが、そこでは「徹底した語学教育を行うなど、本学の教育理念である「学の実化（じつげ）」、すなわち理論と実際との調和を旨とする実学教育に力点を置きたい」と謳われています。こうした中で、視聴覚教育のための環境整備についても、新キャンパス建設と歩調をあわせて、既存キャンパスにおいても更に進められるであろう事を期待しています。

ともかくも、本紀要が視聴覚教育の発展に少しでも寄与できることを祈念して、編集後記の結びといたします。

（編集委員長 熊谷明泰）